

特 44

16

增補
訂正
威海衛

255

385

074545-000-7

特 44-16

威海衛

小田 為岩 / 著

M43

CEJ-0001

|||||

特 44

16

識者

之

明治
43.11.4
内交



明治庚戌夏
應

小田君書

碧石海峯



序文に代へて此れ彈奏家に告ぐ

不肖が琵琶の藝術を有するは只の音楽の幽調
歌の雅遠を尊ぶのふあらずと雖も精神の
修養を以て故に古今精神教育上必要と認む
事此は果にげて歌曲を成すを以て目的とする不肖
者ならずと雖も已に感徳の作あり然るに今回伊
東元帥と其友小田君の勸告を以て已作の足ら

此書を補入する言を辱し欣き措く能はず
 其の由を返答し元帥の許より奏請するに
 日と夜と全く増補訂正成るを以て不肖
 敢て請ふ
 爾後威海衛を彈幕を以て今す諸君已作
 其書を本館より依りて彈幕を以て今す諸君已作

明治三十三年七月三日後山分編應意下

小田錦一 蛙誌

威海衛

著し本編を二段に切らんとして其の
 注意躍り計りたること初段の終りとし二百と日
 の上に去程のを入り、そのとに

名は高麗の威海衛の咽喉あり、威海衛の戦い、聯合艦隊
 司令長官伊東中將の手足の如く率ひて、水雷艇の功
 勳を中々勇ましや。

敵の艦隊由々敷と、威海衛の要害に、防材堅く敷設
 して、灣内深く潜みつゝ、戦ふやうも見えざれば、我聯合
 艦隊は、朝の雨雪に身を浴し、夕の風に揺り、

たゞ遠近とちこちを取巻きて、空しく晴日を過せしが、我陸軍は日島と。劉公島を除く外、所々の砲臺攻取らると。信旗の旗を見て、伊東司令長官ハ直ちに第二第三艦隊の、水雷攻撃を命ずるに、藤田司令官の両司令、その吾々が望むところ。去らばとぞかたちよが起す。誠忠面まことに表されしを、司令長官とぞとに感じ。落す涙と國のこのため、思ひ切らざる別まける。晴しを

二月四日の夜、防禦鋭き死地に入り、第九號艇は素早すぢとと。放ちし魚形水雷も、旗艦定遠の一隻を打沈めしと目的も、其半も過ぎれば、伊東司令長官は、急に第一艦隊の司令を刀し。再勦撃を訓令す。解原司令はこの時、誓つて功を奏せんと。辞ことばを残して立歸り、部下の艇長に旨を傳へ、用意おさく急らす。中より貴重。秘密圖や。秘密書類を集め

つゝ母艦より送る折しむらまき。雲井遙かに歸る雁。言傳
せんと聞かたうる。聲より勇士は故郷に。訣別の書を認め
つゝ心に残る事もたかく。今も此の道に死ありのこゝいざ
去らば。曾て賜ひし長官の。酒を酌むべき時来ぬ
と。言ふを暫しと押止め。餅原司令は形容を改め
今年今夜も艇隊の。馬は尊き今夜なり。再び得
がき時ならんぞ。此等に隘みて酒氣を帯び。千に一つも

誤らば、我海軍の耻辱あり。真心籠る此酒は、國に殉
へて殫きもの。友は手向の酒とせん。又生残る真者は。
祝盃として傾けん。時は此時此酒を。開くは此等の後
に存ると。大事を守り一言に。一途をたぬに言葉なし。

(吟聲) 友はさうたがら各艇長。相見んことをはしき限り。

屍は藻屑に沈むとも。名は長を輝えん。死を共に
する其友は。友のうちたたる友なりぞ。いざや此

吾の別遣に。氷盃を酌交せん

さて龍岩撃の初めとし、餅原司令は艇長を、密に小島(山)に送り、進み入りべき防材の、切目を審に定め、灣内(内)睨らむ胸の中、碧血躍るばかりなり。二月六日其冬の夜といつしか更けて月影は、威海衛の山に隠れ、黒目も分らぬ真の闇。敵兵夢を結ぶ頃、餅原司令は令すべく、防材過ぎ、其後と、各自由に行

動せよと。言ふ其聲は勇み立ち。

(萌)我第一艇隊は、百尺崖の上方より、波を蹴つぎ進み入り、其勢は矢の如く、港灣内に突き入れ、灣内俄かに騒ぎ立ち、探海燈の電光は、我を目ざして照らせし、打出す敵の砲丸は、雨の霰と降り中を、我艇隊はものともせず。忠義は身を、捨小舟、縦横無盡に走せ廻り、各艇怒濤を越せり

さま。龍神ありげり如くも。忽ち放つ水雷は、
天を劈き地を碎き。水煙どつと打上げて此處や
かしこに命中せ音物凄し。

明くまへ七百の東雲に。一隻ごにも傷付けず隊伍正し
く出て来たる。我艇隊の勢ひも、何れを拂ふぞかたう。
斯く堅城鐵壁と頼みこる。旗艦定達を初めとし。東遠
威遠と沈えられ。戦闘力も盡きぬまへ。丁提督も今は

只。重圍のうちれ人々を。救せん外に術ありと。年は明
治の二十八。二月十二日の朝風よ。靡くや力あしくも。
白旗樹て降伏の。使節の船を送りける。武士はと
の哀を知るとや。伊東司令長官は。丁提督の請
を容れ。聊か心慰めんと。贈物をぞ遣はせり。丁提督
は悄然とて。吾事己に終はせりと。心静かに自害せ
し。事を具に報じたる。程壁先に打向ひ。伊東司令長

官は、潜然として言へるや。昨日の敵は今日の友、其遺骸を送る可き。船中に手は無情なる。康濟號の一隻は、重なる武装を解きし後、御身に之を與ふべし。心に任すとありまば、嬉しき涙は咽びつゝ、程壁光ハ此船に。今は聲なき屍を、收めて故園に還らぬ。水師提督の英名を、辱らぬ。めぬは日の本乃、情義も厚き丈夫が。只一滴の涙なり。

(吟替) 嗚呼昨日や今日までも、清國に鋒々たる。

北洋艦隊の司令長官、丁汝昌も仰がれし

身は、斯く成果つらは敵なき、亦も得難き英

雄の、末路お程お是非なけり。

茲に威海衛を占領し、砲聲全く鎮まれば、風雲俄らに一變し。威海の淵は渦巻きし、鎮遠濟遠庚丙號。其外砲艦數十隻、播頭高く雨を呼び、雲を起せし

黃龍も大和劍の角を断ち、勿心も旅は日の丸の、
輝き已たる軍船旅。君が御稜威は天が下。仰が
ぬまのらそたまのり。仰のぬまのらそたまのり。

明治四十三年十一月一日印刷
明治四十三年十一月四日發行

(定價金拾七錢)

著者 小田爲岩
東京市芝區愛宕下町四丁目壹番地

發行者 内田五雄
東京市芝區三田綱町壹番地

印刷者 田所定吉
東京市芝區三田四國町貳番地四號

印刷所 豐盛堂印刷所
東京市芝區三田四國町貳番地四號

不許
轉載

255

385

